

# 令和7年度 日本精神科医学会学術教育研修会 報告

## 薬剤師部門

遠藤 謙二 譜久原 弘

令和7年度の日本精神科医学会学術教育研修会薬剤師部門は、令和7年8月23日(土)～24日(日)の2日間にわたり、秋田県支部の主催によりホテルメトロポリタン秋田で開催された。開催直前の8月20日(水)から21日(木)にかけて、東北地方では線状降水帯による大規模豪雨災害が発生し、秋田県内でも観測史上最多の降雨量を記録した。一部交通機関に影響が出たものの、幸い22日までに復旧が進み、予定通りの開催にこぎつけた。開催期間中は天候にも恵まれ、89名の参加者が集まった。今回の大会テーマは「精神と薬物治療のこれから」であり、まさに時宜を得た内容として参加者の注目を集めた。

開講式では、日本精神科病院協会 秋田県支部長 藤枝信夫先生が開講挨拶、日本精神科医学会 会長 山崎學先生より学会長挨拶、秋田県知事 鈴木健太氏(代読：秘書 又井公久氏)から来賓挨拶をいただいた。

続いて、藤枝信夫先生の座長進行のもと山崎學会長による基調講演「精神科医療の将来展望」が行われた。精神保健福祉行政の歩み、精神保健福祉の動向、精神科医療における社会的偏見、精神科医療の将来像について数多くのデータを示された。病床稼働率低下と少子高齢化に伴う病院ダウンサイジングの必要性、精神科医療に対する根深い偏見、精神障害者の就労困難、障害年金の低さによる生活苦など、社会的課題にも言及された。また、非正規雇用の増加、未婚者の増加、出生率の低下、高齢者の貧困化、エネルギーや食糧自給率の低下など、我が国が抱える問題についても触れられていた。講演は、多岐にわたり、大変示唆に富む内容であった。

講演Ⅰでは、島田病院 院長 郡司啓文先生の座長のもと、秋田大学大学院医学系研究科精神科学講座 助教 吉沢和久先生による「睡眠薬の使い



方」と題して講演いただいた。不眠症の約3割が精神疾患に起因・併存していること、特にうつ病との関係が深いことが示された。睡眠障害を6分類し、それぞれの病態や治療の要点を解説された。睡眠関連運動障害については、動画を用いた説明があり、理解が深まった。また、睡眠薬の歴史の変遷についての話に加え、最近の動向としてはオレキシン受容体拮抗薬の増加、ベンゾジアゼピン系睡眠薬の減少傾向にあることが示された。特に高齢者は睡眠薬の主要な使用者であり、睡眠薬の95%が一般身体科で処方されている実態が示され、なかでもベンゾジアゼピン系睡眠薬では認知症のリスクが高まり、安易に処方されている実情に警鐘を鳴らされていた。

講演Ⅱでは、横手興生病院 理事長 安部俊一郎先生の座長のもと、秋田回生会病院 院長 松本康宏先生による「抗うつ薬の使い方」と題して講演いただいた。講義では、①双極性障害、単極性のうつ病、その他のうつ状態との鑑別が大事(薬剤に詳しくても診立てが間違っていたら意味がない)、②うつ状態の程度によって治療中での薬物療法の重要度が違う(中等度以上の場合は薬物療法、軽症の場合は薬物だけに頼らない)、③中等度以上のうつ病と診断したら単剤で十分量投与、反応がない場合は薬剤変更、部分反応は増強療法を考える、④抗うつ薬の効果はどれもさほど変わりなく副作用はそれなりに異なる、⑤双極性障害や単極性のうつ病はもちろんのこと適応障害もそれなりに自殺企図が多いため注意を要するなど、日常診療で直ちに活かせる具体的指針が提示された。

文化人講演では、秋田緑ヶ丘病院 理事長 ミク

レラン後藤時子先生の座長のもと、新政酒造株式会社 代表取締役社長 佐藤祐輔氏による「秋田のお酒の嗜み方」と題して講演いただいた。この企画は秋田県支部長 藤枝信夫先生の推薦によるもので、6号酵母や秋田産酒米、木桶仕込みといった伝統的な酒造りについての哲学が熱く語られた。それと同時に、佐藤氏の仕事に対する真摯な向き合い方、考え方、そして赤字から黒字にした経営方針は、現在我々が抱えている病院運営にも通じるものを強く感じた。「志ある仕事とは？」との意味を改めて考えさせられた名講演であった。

懇親会では、新政酒造の代表銘柄であり、地元では『幻の酒』といわれている日本酒『No.6』がふるまわれた。また、『きりたんぼ』や『なまはげ』など、秋田の食事や伝統文化も堪能した。

2日目の講演Ⅲでは、加藤病院 院長 加藤倫紀先生の座長のもと、秋田大学大学院医学系研究科 作業療法学講座 教授 太田英伸先生による「児童青年精神科での薬剤の使い方」と題して講演いただいた。講演では、①本人の困りごとを一つずつ解決していく（易怒性コントロール、睡眠障害の治療）、②本人が不登校を選んだ場合に備えて教育や進学準備リストを先生同士で作成・共有しておく、③スクールカウンセラーとの相談体制の構築、④抗精神病薬の使い方など、実臨床に直結する講演であった。

シンポジウムの基調講演として、こだまホスピタル 薬剤部長 谷藤弘淳先生の座長のもと、メンタルクリニック秋田駅前 院長 稲村茂先生による「最近の自殺の傾向とオーバードーズ」と題した講演があった。秋田県の自殺についての現状と自殺予防活動への取り組みについて述べられた。特にオーバードーズを含む自殺企図に対し、援助希求として捉え、受容的に対応する必要性を強調されていた。

シンポジウムⅠでは、こだまホスピタル 薬剤部長 谷藤弘淳先生の座長のもと、菅原病院 院長 補佐 高橋恵利子先生による「過量服薬と精神科訪問看護師の関わり」と題して講演いただいた。訪問看護では、精神状態や服薬管理、生活環境の把握などを通して信頼関係を構築していく。過量服薬や拒薬といった行動については、その心的背

景にある不安や苦痛を早期に発見し、適切な支援につなげることが看護師の重要な役割であると述べられていた。

シンポジウムⅡでは、清和病院 薬局長 皆川英伸先生の座長のもと、こだまホスピタル 薬剤部長 谷藤弘淳先生による「クスリとリスクの境界へ、病院薬剤師が担う役割の深化」と題して講演いただいた。講演では、精神科外来前の面談、精神科版薬剤管理サマリー、ポリファーマシー対策、再発予防、地域連携支援といった多岐にわたる活動の重要性を強調されていた。また、薬剤適正使用の深化と信頼関係構築を通じ、薬剤師が精神科医療に果たす新たな役割が明確にされた。

シンポジウムⅢでは、清和病院 薬局長 皆川英伸先生の座長のもと、株式会社サノ・ファーマシー 追分佐野薬局 齊藤誉弥先生による「健康サポート薬局における自殺・オーバードーズ回避と見えてきた課題」と題して講演いただいた。24時間体制の薬局に寄せられる相談は、世間話から自殺に関するものまでと多岐にわたっており、対応に難渋している様子がうかがえた。「患者の命を守る」という気概が伝わったが、調剤薬局だけでは対応困難であり、多職種連携の重要性について述べられていた。

全体を通して、現場の第一線で活躍する専門家の言葉には重みがあり、参加者に多くの学びと示唆を与える有意義な学術教育研修会であった。今後は、これらの提言をいかに地域医療に反映させていくかが大きな課題である。

閉講式では日本精神科医学会より受講者代表への受講証書授与、秋田県支部への感謝状が読み上げられた。日本精神科医学会会長 山崎學先生の代理挨拶として、日本精神科病院協会 理事 遠藤謙二より閉会挨拶があった。最後に日本精神科病院協会 秋田県支部長 藤枝信夫先生より閉講の挨拶があり、2日間の全日程が終了した。

本研修会の報告を終えるに当たり、秋田県支部長 藤枝信夫先生をはじめ、企画・運営をされた秋田県支部会員の先生方および事務局、関係者の方々に深く感謝を申し上げますとともに、秋田県支部のますますのご発展を祈念申し上げます。